

アドルフ・ロースによる戦間期の 集合住宅建設活動

近代都市生活と建築

岸本督司

はじめに

19 世紀から 20 世紀への転換期に活動した建築家アドルフ・ロースは、第一次世界大戦後の 1921 年、ウィーン市の主任建築家に任命され、集合住宅の建設プロジェクトに従事した。1924 年までという短期間に終わったこの社会参画は、初期のロース研究において積極的に取り上げられてこなかった^{*1}。80 年代以降のカタログやモノグラフにおいては集合住宅タイプごとのプロジェクトが実現されなかったものも含め取り上げられているものの、ロースの活動の一つとして紹介するにとどまり、とりわけその意義を深く追求してはいないように思われる^{*2}。確かに、ロースの主たる仕事は商業建築やアパートの室内

^{*1} 実際、1981 年にグラバニョーロはそのモノグラフにおいて「この仕事に関するドキュメンテーションの欠落と、これほど重要な経験がロースを扱ったモノグラフから外されてこなければならなかったという事実に驚くほかない。ハインリヒ・クルカとルートヴィヒ・ミュンツの両モノグラフが共通して扱ったのは、ホイペルクのジードルンクだけである」と述べている。cf. Benedetto Gravagnuolo, *Adolf Loos: teoria e opere*, Idea Books, Milano, 1981 (C.H. Evans[translation], Art Data, London, 1995). p. 168 (以下、同書については 1995 年 Art Data 版のページ数を示す)

^{*2} グラバニョーロは、作品解説の部分で個々の作品についての説明を行っているが、この活動全体がロースにとってどのような意味を持つかは十分に汲みつくせているとはいえない。

改装、都市郊外の一戸建て住宅に集中しており、施主も工場や商店の経営者、医者や弁護士が多い。こうした仕事に比して、工場労働に従事する大衆向けの集合住宅建設プロジェクトにおいては、公共的な連続住宅の並びにロース独自の思考をどれほど盛り込めたかは疑わしい*³。実際、ロースの代名詞ともいえる大理石のような高価な素材は、こうした集合住宅では用いられることはない。また、これらのプロジェクトが他の建築家と共同でなされたものであり、しかも多くは実現しなかったという点も、この時期のロースの活動についての考察が進展してこなかった一因であるといえる。

しかし、この集合住宅建設の時期はロースのキャリア全体においてもラウムプラン*⁴が家屋建築において前面に出てくる注目に値する時期*⁵にあたり、しかも当時のロースの多様な活動のうちでも、ほかならぬこの建設プロジェクトへの参与が特に重要な意味をもつと考えられる。その理由として以下の三点を挙げておきたい。

まず、この運動への参与が、ロースの数少ない直接的な社会参加の機会だったという点である。それまで、いわば文化人として、新聞に載せる評論などにより都市に生きる人間のあり方を説いていたロースは、ここにおいてより直接的に、具体的な提言と実作において社会へとその影響力を行使する機会を得たのである。ロースは精力的に働き、1919年ごろから最初の一年ばかりは無償で相談役を務めたとされている。そこでのロースの働きは社会的に多くの寄与をもたらしたことはもちろんだが、自身にとっても重要な意味をもったであろう。一方で、それまで主として文化的側面を批評の対象としていたロースが、より即物的かつ実効的な集合住宅の建設にあたってつまびらかにした多くの提言からは、物資や財源についての厳しい条件の中で、近代人の生活に関する自らの思想に合う住宅を作ろうと奮闘する建築家の姿を見ることができる。また同時に、近代的精神の持ち主について論じてきたロースが様々な条件——そこに住む者の多くは工場で働く労働者・大衆であると想定されている——のもとで集合住宅を作るにあたって味わうことになる葛藤と挫折も見出されることになる。

次に、そうしたロースの献身的な関与の中で、多様な建築言語の応用、実践がなされたということが挙げられる。例えば、空間の有効利用としてのラウムプランや造り付けの

*³ 研究者インゲ・ポドブレッキィは、このような研究の状態を形態的魅力の乏しさにも起因するのではないかと示唆している。Inge Podbrecky, Rainald Franz(Hrsg). *Leben Mit Loos*, Boehlau Verlag Ges. m.b.H.und Co.KG, Wien-Köln-Weimar, 2008. s. 131.

*⁴ ラウムプランとは、弟子のハインリヒ・クルカによれば、「空間内で自由に思考すること、様々なレベルに横たわる複数の空間を、階層の区分によらずに計画すること、相互に関係付けられている諸空間によって、一つの調和した、分かつことの出来ない全体へと、空間的に無駄のない形成物へと組み立てること」である。Heinrich kulka(hrsg.). *Adolf Loos: das Werk des Architekten*, Anton Schroll, Wien, 1931. s. 14/ハインリヒ・クルカ編『アドルフ・ロース』岩下真好、佐藤康則訳、泰流社、1984年、一七頁(以下、日本語訳を参照したものは、その頁数を示す。ただし、訳文には適宜変更を加えている)。

*⁵ 新築住宅で初めて全面的にラウムプランが用いられたのは、ルーファール邸(1922年竣工、ウィーン13区)である。

家具、テラスを備えた家屋への傾倒などは、これ以降の一戸建て建築においてさらに発展するものであり、ここでのロースの建設活動が、それ以外の、個人の施主に依頼された設計とも結びついたものであることを示している。

最後に、この活動の終了を機にロースがウィーンを去ってパリにむかうことである。もちろんこれ以降もしばしばウィーンに戻ってきてはいるのだが、ロースは移動を繰り返しながら、ヨーロッパ全体、とりわけパリ、プラハ、ブルゼニといった都市で活動を行うことになる。「真のヨーロッパ人」としてのコスモポリタンを自任^{*6}するロースはそれ以前から他国でも仕事をしていたが、これ以降は少なくとも数量の点では、活動の軸をウィーン以外に移すことになるのである。

以上のように、集合住宅建設活動への参与は、ロースの建築家としての活動に大きな影響を与えた時期であると考えられる。本稿では、集合住宅建設活動に内在的に関わってくる理念と実践を検討し、ロースによる集合住宅建設の実態とその意義を明らかにしたい。またその過程で、「ジードルンク Siedlung」形式か、「ゲマインデバウテン Gemeindebauten」形式かという当時の集合住宅建設活動において大きな争点となった議論とそれについてのロースの対応を確認する。ジードルンクとは、主として郊外に建設された列状住宅群で、小菜園 Kleingarten(発案者の名前からシュレーバーガルテンとも呼ばれる)を備えたものが多い。一方でゲマインデバウテンは、市の中心部を始め各地に多く建てられた、大規模建築物全体を住居群とするもので一区画を丸ごと囲うブロックタイプのものが多く建設された。ロースがウィーン市の住宅建設活動に参画した1920年から23年という時期は、当活動の全体(1934年ごろまで継続)をみるとその黎明期と言うべき、全体の方向性が定まっていく時期に当たる。Eve Blau^{*7}に代表される、この時期のウィーンの住宅建設活動を総合的に扱った研究において、ロースの扱いは必ずしも大きくはない。しかし、ロースの側から見た場合、活動全体の方向性が集約されていく中で、彼が主任建築家としてどのような対応を取ったかということを確認することは、都市においてどのような生活条件が産出されるべきかという建築家の選択をより鮮明にすることになるだろう。

1、文化と生活 「都市と田舎」から「近代の集合住宅」へ

第一次世界大戦終了後、オーストリア・ハンガリー二重帝国の崩壊に伴い、中欧の小国の首都となったウィーン市は、220万人以上の人口を抱え、住宅不足と食料難に陥

^{*6} ロースの最後の妻クレールの伝えるエピソードによる。Claire Loos, *Adolf Loos privat*, Czernin Verlag, Wien, s. 51.

^{*7} Eve Blau, *The Architecture of Red Vienna*, The MIT Press, London, 1998.

っていた*⁸。1919年の選挙によりウィーン市で第一党となった社会民主党は、こうした状態を打開するべく、居住可能な住居の再分配を行いつつ、市の予算を用いた住宅建設に乗り出す。保守層の多い西部の諸州からは揶揄を込めて「赤いウィーン」と呼ばれた当時のウィーンには、しかし社会改革への大きな期待が寄せられ、オットー・ノイラートのような社会学者やオイゲニエ・シュヴァルツヴァルトのような社会改革者、ヨーゼフ・ホフマンやヨーゼフ・フランク、オットー・シュトルナートら多くの建築家がこの郊外ジードルンク建設活動に従事した。ペーター・ベーレンスのように国外から参加した例もある。本章では、この市による住宅政策にロースが関わることになる経緯を概観しつつ、集合住宅に関する彼の思想を確認したい。

市としての住宅建設活動に直結する動きは、第一次大戦中、住居を持たない傷病兵らが自給自足可能な菜園付き住宅を郊外に作るという運動を行ったことに端を発している。市ではこうした自発的な建設活動を市のコントロールのもとで合法化しようとした。社会民主党に籍を置く市議会議員グスタフ・ショイは、1919年にドイツオーストリア田園都市協会に参画し、翌年には市内にジードルンクを建設するためのマスタープランデザインのコンペティションを計画する。この時点ですでにロースには声がかけているが、これには1912年にショイの住居をロースが設計していたことが影響していると考えられる。

こうした経緯の中で市による住宅建設活動の初期は、郊外の小菜園保持型のジードルンクによって住宅難に喘ぎ非合法的に土地を占拠し住居を作ろうとする人々を取り込もうとした時期である。そのためロースにとってもこうしたジードルンクが集合住宅建設の出発点だった。ロースは、主任建築家として活動を開始すると同時に、いくつもの提言を内外に発表し始めた。たとえば、「ジードルンクのための規則」(1920年)「入植者たちの日」(1921年)「住まうことを学ぼう!」(1921年)「一枚壁の家」(1921年)「家屋のタイプについて」(1921年)「建設プランについて」(1921年)といった論考が挙げられるが、これらの中で議論されるのは基本的に郊外型のジードルンクなのである。こうした論考においては、その時点で建設中であったり計画中であったりした集合住宅についての具体的なアイデアが論じられている。しかし、ここではまず、こうした活動を本格的に始めることになる少し前の1918年に発表された「都市と田舎」と題された講演に基づく論考から始めることにしよう。というのも、ここではあらゆる具体的な提言に先立って、近代都市における生活に関しての提言を続けてきたロースが、自然と人間の関係について根本的な思考を披歴しており、これは小菜園付きのジードルンクにおける生活と無関係ではないと考えられるからである。

.....
*⁸ 鈴木隆雄、『ウィーン世紀末の日陰』、「ウィーン世紀末の文化」、木村直司編、東洋出版株式会社、1993年。179頁-204頁。

論客としてのロースにとって、議論の対象は常にウィーンという都市であった。そしてロースの大きな問題意識の一つは、ウィーンから文化が無くなっているということ(文化喪失 Kulturlosigkeit)にあった。ロースにとっての文化とは、盟友カール・クラウスがいみじくも言い表した「骨壺と寝室用便器が違うということ^{*9}」、すなわちカテゴリーの真正さを保つ事物の差異が明確にされていることの内にある。こうした差異がなし崩しにされることにより文化が失われていることの一つの表れとして、論考「都市と田舎」においてロースは都市に暮らす者の服装が農村的になっていることまづ問題化している。

都市民は日が一乗馬服のような服を着、また農民のような服を着る。彼らはしかし、馬一頭、畑一枚持ってはいない。そして、そこで、都市民の文化喪失が始まるのだ。彼は自らの内と外の虚偽に病んでいる^{*10}。

自らの生活の内実とは無関係な、そして他者の生活(農村での生活)の内実と結びついた衣服を着るという外見と内実の不一致により、都市民たちは文化を失っているというのである。話は衣服に留まらない。

二つの異なる文化は、互いに同じ一つの場所に存在することはできない。農民が都市民から完全に分離されているところでのみ、彼は文化を留め置くことができる。しかし、さもなくば文化を持たない農民と文化を持たない都市民がいるだけだ^{*11}。

ロースがこのように述べるとき、都市の郊外に菜園付きのジードルンクを建設することはその分離を破棄することにあたり、彼の思想を裏切っているように見える。しかし、ここでロースは自然と子供の関係に目を移し、外見ではなく生活そのものの農村化を説いている。

しかし、生活という苦行をまだ課されるべきではない、そんな時期もあるのだ。子供時代がそうだ。田舎に、厩舎の横に、堆肥の山の横に学校を作り給え。そして子供たちに、太陽を美的に評価するだけでなく、生命の授与者として敬うよう教え給え。雨や風をうっとうしく思うだけでなく、祝福をもたらす力として求めることを教え給え。

.....
* 9 Heinrich Fischer(ed), *Dritter Band der Werke von Karl Kraus*, Kösel Verlag KG, München, 1955. p. 341.

* 10 Adolf Loos, "Stadt und Land", *Die Potemkinsche Stadt*, Georg Prachner Verlag, Wien, 1997. p. 139.

* 11 Adolf Loos, *ibid.* p. 140.

子供たちは一年中田舎で過ごさなければならない。原っぱや森や草原で季節を感じ取りながら。そうすれば、筋道を外した人間ではなく、安全に生活する教養人が到来し、彼はずっとそうやって生活するはずなのである*¹²。

都市民は暮らしの中に農村的な暮らしを取り入れ、自然とのつながりを取り戻すこと——ロースの考えではそれは実態を伴っており、虚偽ではない——により、文化を取り戻すべきだとロースは言うのである。かくして、ロースは子供に、丸一年を自然の中で生活するよう勧め、ウィーン近郊のセンメリング Semmering という山岳地帯に田園教育舎を立ち上げたシュヴァルツヴァルト女史を称え、次のようにこの文章を閉じる。

シュヴァルツヴァルト女史が数年前、夏の休暇のためにだけ打ち立てたスローガンが、年中有効なものとならんことを。『ウィーン子たちよ、田舎へ！』*¹³

ここで注意を促しておきたいのは、ウィーンで学校を経営しているシュヴァルツヴァルトは先述のように市の集合住宅建設活動にも参画してロースに協力しているということである。シュヴァルツヴァルトに感謝すべき点としてロースの挙げる「共同台所*¹⁴」とは、まさに郊外型ジードルンクにも計画されるものなのである。ロースはウィーンというサークル内でのいわば同志である彼女の活動を擁護するこの文章において自然と人間の積極的なかわりを推し進める。後の講演「近代のジードルンク」において以下のように述べていることからわかるように、小菜園のついたジードルンクの始まりをロースはまさに子供と自然という地点から捉えていたのである。

60年代のライブチヒにダーフィト・シュレーバーという思いやり深い医者がいた。彼は労働者階級の子供たちの状態がひどく悪いことに気づいたのである。彼は、10から20世帯の親たちが互いに協力し、都市の外部に小さな原っぱを借りるべきだと考えた。それは子供たちの遊び場となるはずだ(…)*¹⁵。

都市から離れた自然へと子供たちを解放しようとする点で、これはロースの先述の議論におけるシュヴァルツヴァルトの試みの原型的なものといえるだろう。問題は、子供に対する大人の在り方である。「都市と田舎」において、都市の大人は文化喪失の状態を体

*¹² Adolf Loos, *ibid.* s. 140.

*¹³ Adolf Loos, *ibid.* s. 141.

*¹⁴ Adolf Loos, *ibid.* s. 141.

*¹⁵ Adolf Loos, *Gesammelte Schriften*, Lesethek Verlag, Wien, 2010. s. 638.

現するものとして、あくまで後景にとどまっていた。「近代の集合住宅」のこの挿話においても大人たちははじめ、広場の周りに小屋を建て、仕事終わりにそこに座って^{* 16} くつろぐだけであった。しかし、やがて父親たちは鋤を手にその子供たちの遊び場を破壊し、菜園にしてしまう。この暴力的な破壊行為はしかし、それ自体高貴なものとしてローズに肯定されるのである。

人間のあらゆる活動は、二つの部分からなる。いや、全てではない——私の始め方が悪かった——、だがほとんどの人間の活動は二つの部分からなる。破壊と構築からである。そして活動の中で破壊の割合が増すほど、そして人間の活動が破壊のみから成るとき、そのときそれは真の人間的な、自然な、高貴な活動なのである。紳士という概念はこういう風にしか説明しえない。紳士とは、破壊の力を借りて仕事をする者のことなのだ。紳士は、農民階級から構成されている^{* 17}。

自身の信奉するイギリスの上流階級である紳士 Gentleman という概念をこのように説明することで、都市の淵に農村を生み出すという営為は、ローズのうちで子供という形象を経由し、破壊を通じて「高貴」なものとされるのである。一方で、クレール・ローズが伝えるローズが語ったとされる「私はコミュニストですよ。私とボルシェヴィキの違いは、単に私はあらゆる人を貴族にしようとするのに対し、彼はあらゆる人をプロレタリアにしようとする点にしかありません^{* 18}」という言葉が示すように、ジードルンクを根拠づける高貴さへの傾倒はローズと社会民主党の思想的な決裂点ともなるのである。次章では、小菜園ジードルンクにおける都市民の生活について具体的に述べた論考を参照しつつ、実作の検討に入る。

2、ジードルンクの思想と実践

ローズが最初に設計したウィーンの西側に広がるラインツ動物公園そばのフリーデンシュタットのジードルンクは、第一次世界大戦の戦災者が非合法に占拠した土地に、彼らに貸し付けるということを織り込んだ上で設計したものだった^{* 19}。

ここで、ローズが郊外の集合住宅建設において、どのような考えで取り組んだのかを

* 16 Adolf Loos, *ibid.* s. 638.

* 17 Adolf Loos, *ibid.* s. 638.

* 18 Claire Loos, *op. cit.* s. 40.

* 19 Eve Blau, *op. cit.* p. 102.

いくつかの論考や手稿、講演原稿から改めて探ることにしよう。まさにこの最初のフリーデンシュタットのジードルンクの設計と同時期の1921年5月に、「新ウィーン新聞」に掲載された「住まうことを学ぼう！」と題された論考は、「郊外の集合住宅地建設運動には、新種の人間が要求される*²⁰」として、そこに住まうことになるであろう人々への心構えを説く内容となっている。これはとりもなおさず、集合住宅建設にあたっての自らの思想を開陳しつつ、それを実作に関連付けようとする試みだと言えよう。では「新種の人間」に何が要求されるのかといえば、まず半分農民、半分都市民であること、つまり前述の「都市と田舎」におけるロースの提案を満たすような種類の人間ということである。ここには、二つのことが含意されている。まず、都市の労働者が同時に小菜園を誠実に耕す農民であることである。「都市と田舎」においては、子供のみが生活という苦行から解放されていた。ここでの労働者は、日々の労働と菜園を耕すことの二つを両立させるよう求められているのである。そして次に、半分農民、半分都市民であるイギリス人やアメリカ人の例に倣うことである。ロースは建築家、論客として活動を開始して以来、常にアメリカ、イギリスの二国に範を仰いできたが、ここでもそれは踏襲されている。

つづいてこの論考においては、具体的な家屋の提案がなされている。まず、家屋が二層のメゾネットになっており、上階の寝室部分、下階の日常生活部分へと明確に分けられていること。そして、その家屋が、リビングキッチン Wohnküche を備えたものであることである。「半分農民、半分都市民」であることの内実は、ここでは語られていない小菜園を別にすれば、主にリビングキッチンのほうに関係している。つまり、調理場と食事の場が同じ空間にあるということのショックに耐えられるのは、農民的な精神をもったものであるということである。また、家屋が二層であることを、ロースは、イギリス人とアメリカ人についての叙述から導き出している。「イギリス人とアメリカ人はひとつ屋根の下で、他人と一緒にすまうことを決して愉快的なことだとは思っていない*²¹」というのである。そこから各住居が分離して設計されることは導き出されるのだが、各々の住居において上下二層に生活空間を分離することは必ずしも必要なことではないように見えるかもしれない。しかし、ここにはもう一つ、当時のウィーンの状態に根ざした理由がある。そしてそれは二層をつなぐ階段の位置にも関係している。すなわち、間貸しを防ぐためである。当時のウィーンでは住居不足を背景にアパートの一室の間貸しが横行し、住環境の悪化の一因となっていた。市による管理を難しくするこうした間貸し防止のための案としてロースが出したのが、住居の二層化と、階段を玄関ではなくリビングキッチンに据えることだったのである。上階への出入りをリビングキッチンに限定することで、家庭生活の空間への

* 20 Adolf Loos, "Wohnen lernen!", *Trotzdem 1900-1930*, neuauflage, Georg Prachner, Wien, 1997(1982). s. 165/『装飾と犯罪—建築文化論集—』伊藤哲夫訳、中央公論美術出版、2005年、162頁。

* 21 Adolf Loos, *ibid.* s.165/ 同書 163頁。

部外者の踏み込みを嫌がって間貸しが減ると考えたのである。とはいえ、これがベッド単位の間貸しすら横行していた当時のウィーンにあって、どの程度実効性があったかは不明である。一方で、生活空間と寝室の分離はロースがそもそも家屋のあるべき姿と考えていたことでもある。実際集合住宅に限らず、ロースの家屋建築全般において、寝室と他の生活空間は——別の階に分けることが不可能な場合でもそこへいたる経路などにより——注意深く分離され寝室は隠されている^{*22}。最後の妻であるクレール・ロースに語ったという、「寝室は住宅の中で最も聖なる場所なのだ^{*23}」という言葉をここで思い起こしてもよいだろう。ここでは「イギリス人とアメリカ人」を、一つの規範として持ち出すことで、ロースは二つの空間を分離するという、自身の考える家屋の条件を受け入れさせようとしているのである。居住という人間の基本的な生存条件をどうにか可能にするのにさえ物的資源の不足する状況にあって、自らの考える文化や近代精神を追求しようとする建築家の姿がここにはあるだろう。とはいえ、実際の建築において、それはしばしば居住者の不便となりかねない。

フリーデンスシュタットの集合住宅(図像1)は、幅が7メートル、奥行き6メートルという非常に小さな規模の二階建てが連なった連続住宅であり、各戸の後ろに400平方メートルの菜園が細長く連なっている。リュクシシオのモノグラフにおいて、「レンガの四枚壁を備え、通りに対して右向きに傾いて横たわる斜面にあり、勾配屋根、水道は戸外、汲み取り式^{*24}」とその特徴が挙げられている。一枚壁の家屋建設やフラットルーフといった、ロースによりジードルンクに適用される手法は、ここにはまだ現われてはいない。ロースの二番目の妻エルジー・アルトマン＝ロースは、この空間について詳細に書き記しているが、ロースの空間利用の巧みさを称え、次のように記している。

家は外見上、実にこじんまりとしたものだった。しかしそこに足を踏み入れれば、その人は突如として自分がちいさな宮殿にいることに気付くことになった^{*25}。

では、その空間利用とはどのようなものだったのだろうか。資料が乏しい中で貴重な

.....
* 22 例えば、単層住居の改築のような場合でも、社交の場からの経路をあえて遠ざけている。以下を参照。Eva Stricker, "Raum als Bekleidung zur Bekleidungsthematik bei Adolf Loos am Beispiel des Pilsener Umbauprojekts Wohnung Dr. Teichner", Akos Moravanszky(hrsg.), *Adolf Loos Die Kultivierung der Architektur*, gta Verlag, Zürich, 2008. ss. 222-248.

* 23 Claire Loos, op. cit. s. 29.

* 24 Burkhardt Rukschcio, Roland Schachel. *Adolf Loos: Leben und Werk*, Residenz Verlag, Salzburg, 1982. s. 547

* 25 Elsie Altmann-Loos, Lina Loos, Claire Loos, *Adolf Loos Der Mensch*, Prachner, Wien, 2002. ss. 160-161.

証言であるエルジーの叙述に耳を傾けてみよう。

敷居をまたぐと、長い、せまい通路にいた。その通路は、一階を二つに分けていた。通路の先にあるドアは菜園に通じていて、そのドアから植物の緑色の光が差し込んでいた。左手には二つの部屋があり、その部屋は、仕上げられてはいたしきれいな窓が取り付けられていたけれども、家具はなかった。そうすることで、どの賃貸者も自分の意志でしつらえられるようにとのことだ*²⁶。

通路左側の二部屋は、父親の仕事部屋と、風呂場にもなれば子供の遊戯室や母親の裁縫部屋にもなりうる多目的室である。そして通路の右側にあるのがリビングキッチンであると、エルジーは言う(図像2)。実に小さな空間に生活上必要な各部屋を効果的に組み込んだと言えるだろう。そうしたロースの営為を示すのが、例えば、リビングキッチンから上階の寝室へといたる階段部分である。「階段は、壁の突出部により、リビングキッチンの側に小さなニッチとなる壁面を創り出しており、ここにかまどが格納されていた。かまどは金属製の覆いを備えていて、それは場合によっては食事のにおいを、パイプを通じて外へ導いた*²⁷」とエルジーの言うように、わずかな隙間も逃さず有効活用しようとしたロースの工夫が見て取れる。一方で、こうした空間の詰め込みは、家屋の要素のいくつかを戸外に押し出し、また移動という点で居住者に負担を強いるものだった。実際、住居の見学会が開催されるや否や「次々と魔法はしばんでいった*²⁸」のである。見学者たちは、家屋のみすばらしさに憤慨した。そこでやり玉に挙がったのが、水場が庭側の、家の外にあったことであり、見学者たちは「これでは料理はできない」とし、また階段が狭すぎることもやり玉に挙げられた*²⁹。たしかに階段は狭くて、一段一段が高すぎるものだったとエルジーも認めている。彼女の言うところでは、高い段はそれだけ木材を節約するためであった。

また、ロースの当時の協働者であり、後にエルンスト・マイと共にフランクフルトでジードルンクの設計にあたったマルガレーテ・シュッテ・リホツキーは、ロースのこのジードルンクには、二つの欠点があったと指摘している*³⁰。一つは天井裏の寝室へと向かう階段を玄関口からリビングルームへと移したことであるとする。これにより、リビングであたたまった空気は天井裏に逃げ出してしまうという。もう一つは鉄枠にはめごろされた窓であり、これは清潔さを保つのを困難にしたのである。しかし、ロースに言わせれば、

.....
* 26 Elsie Altmann-Loos, Lina Loos, Claire Loos, *ibid.* s. 161.

* 27 Elsie Altmann-Loos, Lina Loos, Claire Loos, *ibid.* s. 162.

* 28 Elsie Altmann-Loos, Lina Loos, Claire Loos, *ibid.* s. 162.

* 29 Elsie Altmann-Loos, Lina Loos, Claire Loos, *ibid.* s. 163.

* 30 Jan Tabor, *Sie waren so elegant*, Falter, Wien, 2000. s. 60.

少なくとも階段については上述の貸間防止以外にも理由があった。いわく、リビングの暖炉の熱が階段を通して上に上ることは、寝る時に寝室があたたまっていてむしろ経済的であるというのである^{*31}。齟齬をきたす両者の発言のどちらに正当性があるかはともかく、上述の見学者たちの苦情を鑑みても、ロースの家屋が都市の労働者にとって容易には受け入れがたいものであり、設計には、生活の実体からの乖離が窺える。ここで、前に挙げたロースの論考を改めて読み直してみよう。ロースはそこで、居住者が菜園を耕しながら快適に生活していくために必要なこととして、いくつもの提言をしている。そこには、例えば階段の急なこと(上る距離が少ないため、心理的には楽であるという持論を述べている)、排泄物や生ごみをたい肥として使用できるようにするため、汲み取り式のトイレと水回りは菜園側につけることなどがある^{*32}。このようにしてみると、こうした提言はジードルンクにおけるロース自身の思想を表明しているのみならず、反発を受けるであろうポイントをあらかじめ予想して注意深く正当化しているとも取れるだろう。いずれにしてもロースは、建築資材の不足する中でいかにして居住可能な小菜園ジードルンクを作るか工夫を重ねていた^{*33}のである。例えば同じ1921年のヒルシュシュテッテンのジードルンクにおいて、ロースはラウムプラン風に高さのずれた空間を作り出している(図像3)。ロースのラウムプランに関しては、今日もさまざまな解釈がなされているが、このジードルンクにおける高さのずれは、空間の経済的使用というクルカの解釈に従うのが妥当だろう。というのも、この部屋は鶏用の空間だからである。

一方で、資材不足という条件はロースに、建設費の削減を目的として「一枚の壁の家」という手法の案出を促しもした(図像4)。この手法は建設上の大掛かりな土台を必要とせず、二枚の耐力壁とその間に中空につるされた正面と背面にあたる壁、そしてさらに両耐力壁の間に床を渡すという方式であり、外部に耐力壁を一枚足すことで容易に家屋の継ぎ足しができることから、「一枚の壁の家」という名が付けられている^{*34}。この手法はドイ

.....
* 31 Adolf Loos, "Moderne Siedlung", *Trotzdem 1900-1930*, neuauflage, Georg Prachner, Wien, 1997(1982). ss. 198-199/ 一八九頁。

* 32 このほか、耕作可能面積を適正にするための畑の形状や、風向と日差しを念頭に置いた家屋の向きなどがある。Adolf Loos, "Über die Haustypen", *Die potemkinsche Stadt*, Wien, Prachner, 1993. ss. 185-188. および、Adolf Loos, "Über den Verbauungsplan", *Die potemkinsche Stadt*, Wien, Prachner, 1993. ss. 189-193. 本稿では詳しく述べることはできないが、これらにはすでにドイツでいくつもの小菜園ジードルンクや公園を手掛けていた造園芸術家レベレヒト・ミッゲの影響が色濃くみられる。彼は循環可能な農法を志向した理論家でもあった。

* 33 例えば、この見学会の際にはロースは私財を投じて家具を揃え、さらに後にはアンゴラウサギを仕入れて家畜小屋に飼い、その毛皮で婦人たちを引き付けようとしたと、エルジーは伝えている。Elsie Altmann-Loos, Lina Loos, Claire Loos, op. cit. s. 163.

* 34 Adolf Loos. „Das Haus mit einer Mauer“ *Die potemkinsche Stadt*, Wien, Prachner, 1993. ss. 180-184.

ツの集合住宅建設活動において進行したような住居の規格化というよりは、住民による自助的な住居の継ぎ足しを可能にするためのものであるが、ロースの中でそれにとどまらない発想の上での発展性をもっていたと考えられる。リホツキーは、一枚壁方式は単に資材を節約するだけでなく、家屋の中で使用可能な空間を広げることでもできるとして、そのインパクトを次のように記している。

ロースは、私の知るところでは、当時のウィーンにとってまったく新しい提案を行なった。もはや外壁ではなく、二つの列状ジードルングハウスの間の分離壁こそが、木材の天井梁のための支持壁として造り上げられるべきとされたのである。どの面にも、ジードルンクのひとつの住居の半分の壁の負荷だけがかかるというものだった。さらにロースはそれによって、リビングキッチンからの階段を、梁を交代させることなく外壁と平行に置くことができたのである。リビングキッチンはこのやり方でより広くなったし、家の奥行きも好きなだけ大きくできた。支持的な役割をもつ隔壁が必要なかったためである^{* 35}

とはいえ、「一枚の壁」方式は、両側の壁体と前後の中空非耐力壁、そして天井と床のみからなる閉鎖的な空間をまず作るという点で、構造上、設計には制約が生じることになる。例えば、家屋のサイズ面では、両側の耐力壁を渡すのに床は桁一本の長さを超えたスパンの家屋は造ることができず、また、耐力壁は家屋の側面でなければならないため、方向的に制限が生じることにもなる。さらには地下室や屋根裏部屋も作らないという前提のもとで考案されている^{* 36}。ジードルンクの建設のためにロースが案出した様々な方法は多くの反発も受けたが、限定された条件において都市の際に農村を出現させる方途を入念に図ったものなのである。

3、屋上テラスのある家：大規模集合住宅

ウィーンは、1921年以降、州と同格となり、強力な累進課税制度をとる住宅建設税の徴収により、大規模な住宅建設を行うようになった。この過程で、ウィーン市の政治勢力

.....
^{* 35} Margarete Schütte-Lihotzky : *III -Wohnen 20er Jahre*, undatiertes Typoskript, s. 42. 以下の書籍からの引用による。Edith Friedl, *Nie erlag ich seiner Persönlichkeit...*, Milena Verlag, Wien, 2005. s. 264.

^{* 36} 一方でまた、ロースがこうした「壁体」を単位とした方式を考案したという事実自体もまた、四方を囲う絨毯から建築を考えるゼンパー譲りの「被覆の原理」以来続く、ロースの壁体重視（それはラウムプランにも通底する）を物語っていると考えられる。

において、ジードルンク形式か、ゲマインデバウテン形式かという論争が起こることになる。ウィーン市の第一党である社会主義的政党、社会民主党はジードルンク形式ではなくゲマインデバウテン形式に建設活動の主眼を置いた。というのは、ジードルンクにはこれまで見てきたように小菜園が付属しており、土地と人との結びつきを強める性格のものであるため、その土地家屋の私有に結び付きやすい。社会主義を標榜する同党は、家屋の私有化が進むことで労働者たちがブルジョア化することを恐れたのである。もちろんゲマインデバウテンは一戸当たりの面積が小さく建設費も安く済むという理由もあった。反対に第二党であるキリスト教社会党は、カトリシズムの残る中間階級と農民階級への配慮からジードルンクを推していた。

論争の結果^{*37}、ウィーンにおいては市議会の勢力差を反映して、ゲマインデバウテン形式を推し進められる形となるのだが、ここで検討したいのは、こうした事態の変化にロースがいかに対応したかである。もっとも、複雑な政治力学の働いたであろう当時のウィーンにあってロースがどのように立ち振る舞ったかという具体的な動きを示す資料は管見の限り存在しない。しかしこれまでの議論を通じて、ロースは集合住宅についてジードルンクを中心として考察していた。後にパリにおいてインタビューを受けた際（そのインタビューには象徴的にも「ウィーンのゲマインデバウテンは論じるに堪えない^{*38}」と題されている）、温水管やセントラル・ヒーティングといったインフラの不備を指摘して批判していることから、少なくともウィーンで実際に建てられたゲマインデバウテン形式の建物に全面的に賛同してはいなかったと考えられる。また、最後の妻クレールの回顧録においては、だれもが家屋と庭の私有をすべきだという発言をしている^{*39}。市がゲマインデバウテンを主流に置くことになる結果は、ロースの集合住宅建設活動の断念と無縁ではないと考えるのが自然であろう。

一方で、ジードルンク形式についてもロースにはそれをより発展させるための理念があった。ロースにとって目指すべき集合住宅とは、単に連続する住宅という意味だけではなく、複層階をもち、下層に位置する住居の屋上部分を庭や通路、テラスとして利用可能な連続住宅であった。そのような建築を目指したのは、それがロースにとって形態的に魅力を感じさせるものであったためだとひとまずはいえよう。ロースが初めてそうした家屋を作り上げたのは、前述のグスタフ・ショイの邸（図像5）においてである。ただし1912年のこのショイ邸においては、テラスの段状形式が建物の外形にそのまま適用され、しか

.....
^{*37} こうした論争の過程については、次を参照。北山優子「両大戦間期のウィーンにおける住宅政策に関する研究 市営住宅建設をめぐる論争に注目して」日本建築学会計画系論文集 第459号、1994年、九九頁―一〇七頁。

^{*38} Adolf Loos, "Die wiener Gemeindebauten vertragen kein Kritik," *Gesamelte Schriften*, Wien, Lesethek Verlag, 2010. ss. 715-717.

^{*39} Claire Loos, op. cit. s. 43.

も段状テラスが街路と並行に形成されたために、街路に階段が出現したような印象をあたえる外形となっている。ウィーン人たちは、ショイ邸に対して、そのテラスと階段状の造形のために揶揄を込めてアルジェリア的という評価を与えたという^{*40}。ショイ邸を別にすれば、ロースがテラス形式を備えた建物の設計を行うのは、例えば百貨店やホテル^{*41}など、モニュメンタルな形態を許容しうる公共建築においてであった。実際、ロースがテラスについてほとんど書かなかったのは、ショイ邸の設計において自ら語ったように「朝起きて、そのまま外気に触れられるような場所に出ることができるのは素晴らしい^{*42}」という感覚的理由を除けば、必要上それを擁護するすべを持たなかったからであると考えられる。家屋がテラスを備えていることは、ウィーンにおいて伝統的なものではなく、また経済的というわけでもない^{*43}。しかし、ジードルンクの建設と同時期にロースは複数のテラス付き建築の立案に乗り出す。そのように思い至った経緯について、ロースは1926年にシュトゥットガルトで行った講演「近代の集合住宅」において、次のように述べている。

私の構想を完全なものにするのは、テラス付きの住居でなければならない。階段が戸外にあり、それによってさまざまな階のテラスに行ける集合住宅である。こうしたテラスは階上の街路とも呼べる。その各々の住居には、それぞれ固有の玄関口と小さなあずまやがある。ここには夕方くつろいだ気持ちで座り、休むことができる。またテラスでは、子供たちは車などに轢かれる危険も無く遊ぶことができる。これは、非常にしばしば新聞に載る、両親がはたらきに出ているために放置されざるを得なかった子供が、(...) 息苦しさから逃れようとして、窓枠から乗り出して径や中庭へと落ちてしまう事故から出発した、私のアイデアだった^{*44}。

ここでもまた子供と自然(外気)の接触が、ロースの中での動機づけとされているのは興味深い点である。とはいえ、実際にははるか以前、1912年からロースが段状テラス形式の建物のプロジェクトを立ててきたことを考え合わせれば、こうした言葉を額面通りに受け取るわけにはいかないだろう。むしろロースはこの建設活動に関わることによって初めてテラス付き連続住宅を意義付ける条件を獲得し、その形態を実地に試みる機会を得た

.....
^{*40} Adolf Loos, "Das Grand-Hotel Babylon" *Die potemkinsche Stadt*, Wien, Prachner, 1993, s. 197.

^{*41} グランドホテル・バビロン(1923年、パリ)やタウンホール(1923年、メキシコ)のこと。いずれもウィーンより温暖な気候の場所に建てることを前提としていた。

^{*42} Adolf Loos, *ibid*, s. 197.

^{*43} 伊藤哲夫、『ウィーンにおける近代集合住居について』、『国士舘大学工学部紀要』30号、国士舘大学工学部、1997年、42-43頁。

^{*44} Adolf Loos, "Moderne Siedlung", *Trotzdem 1900-1930*, Wien, Prachner, 1997, ss. 205-206./二〇八、二〇九頁。

と言えるのではないだろうか。

ロースの構想する屋上のテラスを備えた集合住宅は完全な形ではついに実現することはなかった。しかし、いくつかの集合住宅や計画をその派生物として見るができるだろう。ひとつは、ホイベルクのジードルンク（ウィーン 17 区、1921 – 1923 年）である。このジードルンク（図像 6）は、ロースが初めて前述の一枚壁システムを適用したジードルンクであり、また急峻な丘にテラス状の庭園を持っており、それに合わせて家屋にも幾分かの段差が付けられている。構想段階の鳥瞰図（図像 7）にも現れているように、一枚壁方式を用いたこのジードルンクは屋根裏部屋や地下室を持たないが、フラットルーフであり、この時点では屋上を往来できることがもくろまれていたのである^{* 45}。ウィーンの郊外にあって、小菜園と限定的ながら屋上テラスを備えたこの集合住宅は、ロースにとって大きな達成であったことは間違いない。

同時期にロースは立て続けに屋上をテラスとして利用する建築を案出する。ここに集合住宅と、ウィーンに建てることを企図されたものではないが一風変わった住居複合体が含まれていたことに注目したい。前者の集合住宅（図像 8）は、ウィーン 10 区のインツェルスドルファー・シュトラッセ沿いに計画されたものであり、その内部には複数の種類の家屋や仕事場が据え付けられている。この建物の模型を見てみよう（図像 9）。まず、この住居複合体は二つの列状建築からなり、各住居はすべて外側に面している（内部に含みこまれた部分は、貯蔵室、通路となっている）。かつ、段状になっている側はテラスに合わせて二層分が一世帯とされており、これはまさにロースが「住まうことを学ぼう！」の中で述べている「重ねあわされたコテージ」そのものである。またテラスは往来の可能な通路となっており、各戸にはテラスから直接入ることのできる入り口がある。これらすべては、ロースが小菜園を伴った家のデザインにおいても重視していた要件を満たしており、イタリアの研究者ベネDETTO・グラバニョオーロは、この計画案を、ホイベルクのジードルンクがより都市の内部へと移行されて発展したものだとして次のように述べる。

この住居複合体が、ホイベルク・ジードルンクの個々の生活区画の巧妙な組み合わせの結果にすぎず、大都市の中心部では不可能な菜園を除去しテラスに変えたものだということは事実である。^{* 46}

すなわち、都市郊外のジードルンクの生活内容を都心部に持ち込んで考案した、ゲマインデバウテン形式に対するオルタナティヴであるといえるだろう。ロース自身、こうした形式をウィーンに持ち込むことをためらいはしなかった。ウィーンにおいてオリエント

.....
^{* 45} Eve Blau, op.cit. p. 107.

^{* 46} Benedetto Gravagnuolo, op. cit. p. 177.

のようなテラスが適用されてこなかった理由を、寒冷な気候のために雪に対処する必要がある、傾斜のない屋根が持ちこたえられなかったためであるとしている。つまり、おがくず入りのセメント材 Holzzement によるフラットルーフが技術的な問題は解決しているというのである^{* 47}。こうして集合住宅において、心理面（子供たちの安全のため）と技術面（フラットルーフ）両面からテラスを備えた住宅を可能とする条件を獲得したロースは、それを都市の内部で可能な大規模集合住宅として敷衍しようとしたのである。それは、社会民主党の政策がジードルンクを推し進めた 1919 年当時からゲマインデバウテン建設の集中へと変化したことに対応してもいるだろう。ただし、この際に小菜園というジードルンクの主要機能とされた自然的要素はそぎ落とされ、日光や外気へと開けた空間がかるうじて残されている。

後者の住居複合体はコート・ダジュールに建てることを想定したものであり（図像 10）、ここでも段状になった建物の各段差が上の階の建物のテラスとして利用されている。しかし、このデザインは前者と比べて実現性が乏しかったためか、あるいはコート・ダジュールという土地柄を重視してか、より大胆にロースの理想を反映したものとなっているように思われる。リュクシシオらのモノグラフには以下のように描き出されている。

住居群の断面図は、付属室は天井高が低く、主室は高いということ、さらに建物の区分けには空間の経済的使用と並んで採光が決定的な役割を担っている、ということを示している。（…）それぞれのタイプの空間の高さは、たんに階の高さの違いによって異なっているだけでなく、その階の中においてもさらに、複雑なラウムプランのプログラムによって差異化されている。とりわけ、四階層分を含んだタイプでは、不釣り合いに大きな居住空間の浪費が、複雑な階段の経路によって目につくようになっていく^{* 48}。

ここで述べられているように、住居群は内外に複雑な階構造の差異がつけられており、それはロースの建築的傾向であるラウムプランを反映している。すべての住居はもはや邸宅 Villa と呼ぶべきものとして構想されている（図像 11）。「屋上庭園を有する 20 のヴィラの集合体」Gruppe von zwanzig Villen mit Dachgärten という呼称はそのことを現しているといえよう。ここでラウムプラン的な空間の配置が採用されていることを恣意的な判断や嗜好の問題と断定はできない。「テラスを有した複数の家屋」が階ごとの平面形の差異を前提としており、それを採光や換気に注意しつつ 20 という戸数積み重ねることの困難を克服するために、各住戸内での階層への操作が要請されるからである。ここに見出さ

^{* 47} Adolf Loos, "Das Grand-Hotel Babylon," *Die potemkinsche Stadt*, Prachner, Wien, 1993. s. 197.

^{* 48} Burkhardt Rukschcio, Roland Schachel. op. cit. ss. 576-577.

れるのは、テラスというロースの外形的な好みと、部屋割りを三次元で思考するというロースの建築の根底にある傾向が、互いに結び付いた事例なのである。そうした構想を示すこの計画案が、集合住宅への取り組みと並行する形でもたらされたということはあらためて強調されるべきだろう。

その後にロースが設計に携わったオットー・ハース・ホフ (図像 12) は、もう一つの派生物と言える。クリスティアン・ファシングダーによれば、この現在も立つオットー・ハース・ホフは、経済的な理由により棄却されたロース案の代用品なのである^{* 49}。これは、ロースだけでなく、ペーター・ペーレンス、ヨーゼフ・フランクやヨーゼフ・ホフマン、オットー・シュトルナートらも携わったヴィナルスキー・ホフというゲマインデバウテンの一棟である。このプロジェクトはそもそもゲマインデバウテンではなく、ジードルンクをオーストリアに根付かせようとする団体「オーストリアジードルンク・クラインガルテン事業協会 ÖVSK (Österreichischer Verband für Siedlungs- und Kleingartenswesen)」によって、自治体が主導するゲマインデバウテンに対するカウンタープロジェクトとして立ち上げられたものであった^{* 50}。同会に参加していたロースはインツェルスドルファー・シュトラッセのプロジェクトと同様のメゾネットタイプの住居を連ねさせた連続住宅を立案した^{* 51}。しかしロースは自案への自治体の賛同を得ることができず^{* 52}、最終的に出来あがった建物はゲマインデバウテン形式となる。テラス風の空間は一部にだけ適用されているが、人の往来を可能にするようなものではない。この建物の完成を待つことなく、ロースはウィーン市の主任建築家を辞し、パリへと発つのである。

結び

ここまで、ロースによるウィーンの集合住宅建設運動への関わりについて、その思想と実践の密接な絡まりを取り上げてきた。本稿を締めくくるにあたり、ウィーンでの集合住宅建設活動における挫折が、ロースにもたらした影響についてあらためて考えてみたい。

ロースによる集合住宅建設運動は、最初に述べ、これまで確認してきたように、確か

* 49 Kristian Faschingeder, "Die Korrektur: Loos' unbekannter Gemeindebau", *Adolf Loos Die Kultivierung der Architektur*, gta Verlag, Zürich, 2008. s. 188.

* 50 Kristian Faschingeder, op. cit. s. 191.

* 51 ペーター・ペーレンス、オットー・シュトルナートも同様に段状のテラス保持集合住宅を提案している。Eve Blau, op. cit. pp. 299-303.

* 52 マルガレーテ・シュッテ・リホツキーによれば、同案は傾斜地にのみ適したもので、平地では大きな死んだ空間を生み出すものだった。Margarete Schutte-Lihotzky, *Warum ich Architektin wurde*, Residenz Verlag, Salzburg, 2004. s. 64.

に最終的には辞職という形で幕を閉じた。とはいえ、そこには、一つには都市と農村にかかわる文化についての思想を実生活に適用するいくつかの実践があり、また一つにはそれ以降の建築においてもたびたび現れることになる手法やモチーフの実験があるということも見てきたとおりである。これらのもつ意味はロースの建築活動において決して小さくはないだろう。

とりわけ、テラスの形式は、その後のロースの家屋建築においてしばしば用いられ、トリスタン・ツアラ邸(1926年)やミュラー邸(1927-30年)などでも適用された。なかでもツアラ邸における建物背面(図像13)のテラスを用いたセットバックには、ラウムプランにより階層付けられた内部空間との洗練された連動性が見出せるものとなっている(図像14)*⁵³。

パリへ移って以降、ロースはウィーンにも立ち寄るが、作品数という点で見ると、パリやプラハ、プルゼニなど他国の諸都市での活躍が目立つようになる。ウィーンでの次なる大きな仕事は、代表作の一つモラー邸(1928年)まで待たねばならず、その後も数えるほどしかない。その中にはヨーゼフ・フランクの企画したウィーン工作連盟のジードルンク展への出品(ハインリヒ・クルカと共同、1932年)が含まれており、晩年においてもウィーンと集合住宅への興味を失ってはいなかったことを示しているといえるだろう*⁵⁴。一方で、フランスではツアラ邸を設計したほか、ジョセフィン・ベイカー邸や、既にみた住居複合体などを計画した(いずれも実現はせず)。また、チェコにおいては最高傑作と言われるミュラー邸(1927-30)やヴィンテルニッツ邸(1931)を設計することになる。「オーストリアに西洋文明を導入*⁵⁵」しようとしたロースは、ウィーンという足場を自ら外すことで、よりコスモポリタンの活動の幅を広げることになったのである。

*⁵³ ツアラ邸以降の家屋建築におけるラウムプランの適用については以下を参照。岸本督司「アドルフ・ロースにおける素材と空間：ツアラ邸以降の家屋建築を中心に」(『美学』(63(2)pp. 61-73))

*⁵⁴ ただしこの際の出品作(現存)は、ジードルンク形式ではなく、小家族向けの二軒連続住宅である。

*⁵⁵ 1903年にロースが創刊した雑誌Das Andereの副題「オーストリアに西洋文明を導入するための手引きEin Blatt zur Einführung abendländischer Kultur in Österreich」より。

図版

図像の出典は以下の凡例により示す。

- I …Ralf Bock, *Adolf Loos Works and Projects*, Skira, Milano, 2007.
- II …Richard Boesel; Vitale Zanchettin(a cura di), *Adolf Loos 1870-1933 architettura utilita e decoro*, Electa, Milano, 2007.
- III …Benedetto Gravagnuolo, *Adolf Loos: teoria e opere*, Idea Books, Milano, 1981.
(C.H. Evans[translation], Art Data, London, 1995) - ページ数は 1995 年の英語版で
記す。
- IV …Heinrich kulka(hrsg.), *Adolf Loos: das Werk des Architekten*, Anton Schroll,
Wien 1931.
- V …Burkhardt Rukschcio, Roland Schachel, *Adolf Loos: Leben und Werk*, Residenz
Verlag, Salzburg, 1982.
- VI…Burkhardt Rukschcio(Hrsg.), *Adolf Loos : Graphische Sammlung Albertina*, Wien
2. Dezember 1989 - 25. Februar 1990, Graphische Sammlung Albertina, Wien,
1989.

I の 50 ページを出典とする場合、[I – p. 50] とする。

図像 1

ラインツ・ジードルンク正面

(現在まで残った唯一のもの)[I – p. 215]

図像 2

ラインツ・ジードルンク、
地上階平面図 [I - p.217]

図像 3

ヒルシュシュテッテンのジードルンク、
断面図、ロース・アーカイブ 045.
[V - p.542]

図像 4

「一枚壁の家」模式図、
ロース・アーカイブ 702 [II - p.236]

図像 5

ショイ邸、ラロツヒェ街からの眺め
[III - p. 148]

図像 6

ホイベルク・ジードルンク、
ロース・アーカイブ 2362.
[V - p. 540]

図像 7

ホイベルク・ジードルンク、
企画時の完成予想図 [IV - abb.110]

図像 8

インツェルスドルファー・シュトラーセの集合住宅図、1923 年、
ロース・アーカイブ 460.
[II - p.234]

図像 9

インツェルスドルファー・シュトラーセの集合住宅、
50 分の 1 模型、
製作：ウィーン工科大、ハンス・プッフハンマー教授他。
[II - p.232]

図像 10

コート・ダジュール、
屋上庭園を備えた 20 の邸宅の複合体、計画図、1923 年、
ロース・アーカイブ 0407.
[VI - p.383]

図像 11 コート・ダジュール、屋上庭園を備えた 20 の邸宅の複合体、
1923 年、各部屋の平面図。ロース・アーカイブ 372. [V - p.576]

図像 12 ウィーン、オットー・ハース・ホフ [III - p.183]

図像 13

パリ、トリスタン・ツアラ邸、1926 年、背面部、
ロース・アーカイブ 3254. [I - p. 230]

図像 14 トリスタン・ツアラ邸断面図 (向かって右が背面) [I - p. 230]

Architektonische Tätigkeiten von Adolf Loos für Bauen der Siedlungshäuser in Wien in der Zeit zwischen den Weltkriegen: Das Leben in der modernen Stadt und die Architektur

Masashi KISHIMOTO

Adolf Loos, der zu Beginn des 20. Jahrhundert in Wien und anderen europäischen Städte als Architekt arbeitete, wurde 1921 von der Gemeinde Wien zum Chefarchitekt des Siedlungsamt ernannt. Bei dieser Gelegenheit versuchte Loos mit aller Kraft, mehrere Siedlungen für die Gemeinde Wien zu bauen und sein Gedanke über das Leben in Siedlungshäusern mit Kleingarten zu realisieren. Die früheren Forschungen über Loos hatten oft nur niedrige Bedeutung in dieser Tätigkeit finden können. Aber dieser Aufsatz untersucht erneut diese Tätigkeit von Loos. Denn diese Bebauungstätigkeit hatte in drei Gesichtspunkten, eine große Bedeutung in Loos' Karriere.

Erstens war es eine Gelegenheit für Loos, um sich direkt mit Sozialproblemen zu beschäftigen. Damals entfaltete sich in Wien die Siedlerbewegung, die anstrebte, am Rand der Stadt Siedlungen mit Kleingarten anzulegen. Loos vertrat diese Bewegung und schrieb mehrere Aufsätze, zum Beispiel "Stadt und Land", "Wohnen Lernen!", "Moderne Siedlung", usw., sie erläutern, warum und wie man in dieser Siedlung wohnen soll. Aus diesen Schriften kann man seine Gedanken über moderne Städte und moderne Menschheit herauslesen.

Zweitens erfand Loos in dieser Tätigkeit mehrere architektonische Methoden für Lösung der damaligen Baukostenfragen und der Mängel der Materialien. Er probierte einige Motive aus, für die er sich lange Jahre interessiert hatte. Die Gemeinde Wien hatte damals nicht genügend Material und Haushalt für Bebauung der Gemeindeshäuser. Als Chefarchitekt schaffte Loos eine Methode "Haus mit einer Mauer", das ein Hausbau mit weniger Materialien als zuvor ermöglichte. Und gegen die "Gemeindebauten", die die Sozial-Demokratische Partei, die Wiener Regierungspartei, in dieser Zeit betrieb, schlug Loos als Alternative einen anderen Haustyp "Terrassenhäuser" vor. Es waren Häuser mit Dachterrassen. Seit dem Entwurf von Haus Scheu in 1912, hatte Loos die Hoffnung diesen

Haustyp in Wien zu realisieren. Dieser Haustyp hatte für Loos eine wichtige Bedeutung, denn die Terrasse hat bei Loos' in seiner architektonischen Idee, "Raumplan" eine wichtige Bedeutung.

Drittens verließ Loos Wien, nach seinem Rücktritt als Chefarchitekt. Er arbeitete danach in Paris, Prag und anderen europäischen Städten, aktiver als zuvor. Loos hatte sich eigentlich für Kosmopolit gehalten. Trotz Liebe und Hasse für eine Stadt, Wien war immer das Zentrum bei diesem Architekt. Sein Scheitern in der Siedlungstätigkeit gab Loos den Anlass nach Paris zu fahren. Dort schaffte er das Meisterwerk "Haus von Tristan Tzara" und entwarf andere umgebaute Projekte, zum Beispiel "Haus von Josephine Baker." Danach baute Loos ein anderes Meisterwerk, das "Haus Müller" in Prag. Andere Städte gaben Loos weitere Möglichkeiten für Bauen und Verwirklichung seiner architektonischen Idee.

Aus oben erwähnten Ansichten kann man nicht leugnen, dass Loos, trotz Scheitern seiner Siedlertätigkeit, Gelegenheiten hatte, um seine Idee in die Praxis umzusetzen und neue Bebauungsmethoden auszuprobieren. Beides ist in Bezug auf Innovation von Loos untrennbar.